

改訂
昔話とは何か

小澤
俊夫

目次

装丁
小林将輝

第一章 昔話の語り口 13

- 1 語り口のおもしろさ 14
 - 昔話の本質をなす語り口 14 固定性・孤立性・極端性 25 最前部優先と最後部優先の法則 28 くり返し 29 一次元性 31 非写実性 32 昔話は原色を好む 35 エピソードの精密な結合 36 水の支配者 37 切紙細工的語り方 38 非現実なことは価値が低い 39 主人公の条件 41 厳密な量的等価 42 両義性 44 状況の一致 46
- 2 リユティ理論のまとめ 50
 - 一次元性と平面性 50 純化作用・含世界性 51 孤立性・普遍的結合の可能性 52 昔話が示す世界像 55
- 3 伝承される形と存在する形 60
 - 昔話の形式意志 60 昔話と伝説 63 伝承される形と存在する形 65 自己修正の法則 66

4 グリム童話の場合 70

グリム童話集の変遷 70 民衆精神のみことな体現 78

5 日本の昔話の文芸的特質 80

魔的なものと人間との関係 82 固定性と図形性 84 昔話独特のレトリック 86 昔話の中の経済性または節約性 87 奇跡と小道具 88 汚物 91 水準化作用 92 話の発端 96 日本の古い信仰の名残りとその変化 97 パーフォーム 98 二単位の構成 102 日本の昔話の動物観の変遷 103 日本とヨーロッパの昔話の共通性と異質性 104 正体の発見 106 時間と輪郭のあいまいさ 107 一夜の体験を語る昔話 111

第二章 昔話の語る人間像 113

1 子どもの成長と昔話 114

「未知のものと出会う喜び」と「既知のものとの再会の喜び」 114 能動的な聞き方 118 アンティシペーション 120 物語る視点 124 忠告者 126 話のすじが一本であること 129

2 さまざまな主人公¹³²

昔話は内面の世界を話のすじに投影する¹³² 人物の孤立性¹³³ 「上向きの履歴書」と「一夜の体験」¹³⁴ ドイツ教養小説の伝統と昔話¹⁴⁰ 和歌・俳句の流れと日本の昔話¹⁴¹ 霊力を持ったものとの出会い——自然観の違い¹⁴⁴ 自然の動物から死んだ動物の霊まで¹⁴⁶ 末っ子¹⁵³ 人間の可能性と忠告者¹⁶² 外観と本質¹⁶⁸ 物差しはひとつでない——人間への多面的な評価¹⁷⁹

3 日本の昔話の価値観¹⁸⁷

価値観は集合的にみなければならぬ¹⁸⁷ 他者への親切¹⁸⁹ 「人まね」は決定的に不幸にいたる¹⁹² 度胸と知恵¹⁹³ 第一義的に教訓を語るのではない¹⁹⁵

4 ドイツ語圏の昔話の価値観¹⁹⁸

(一) ドイツ・オーストリア¹⁹⁸ (二) スイス(レトロマンを除く)²⁰¹ (三) スイスの少数民族レトロマン²⁰² 親切という共通要素²⁰⁶ 遊びの余地——正直と勤勉を特に重視しない²⁰⁷ 勇敢——救済への条件²⁰⁸ 知恵——その二面性²¹⁰ 文芸的遊びの世界²¹² ハンディキャップを持つ主人公²¹⁴ 昔話から学ぶものは多い²¹⁵

第三章 昔話の現代的意義²¹⁹

1 昔話は母国語である²²⁰

昔話はなぜ長い語りつがれてきたか²²⁰ 帰属感を生みだす昔話²²¹ 原風景としての昔話²²⁶ 昔話はいつの時代のものか²²⁸ 誰にとつてもおおよそ自分の前と思える程度へのだたり²³¹ 昔話の持つ漠然性²³² 発端句に秘められた意味²³⁴ 母国語は捨てられない²³⁵

2 子どもは昔話を聞きたがっている²⁴²

昔話を口で伝えることはもうできないのか²⁴² 土地言葉であれ、共通語であれ²⁴⁵ 幕田仁さんの語り²⁴⁶ 文明が進歩したからこそ、あたりまえの行為を²⁵⁷ 私たちは昔話伝承の途中にいたのであって、終点にいたるのではない²⁵⁸

注／本書で挙げた昔話²⁶⁰

あとがき²⁶⁴

本書は、一九八三年刊行の『昔ばなしとは何か』の改訂版である。八三年に大和書房から刊行されたが、一九九〇年には版元が福武書店に移り、福武文庫の一冊として同名で刊行されてきた。二〇〇七年になり、福武書店（現ベネッセコーポレーション）としては本書の刊行を終了したい旨、申し出があった。

一方、世の中の情勢を見ると、二十六年前とは打って変わり、全国で絵本やお話の「読み聞かせ」や「語り」が行われるようになってきている。ここでは、創作絵本や創作のお話に混じって、昔話がしばしば取り上げられている。

ところが現在の日本では、本来の伝承的語り手から昔話を聞くことはほとんど経験できない。従って、「昔話は絵本や子ども向きの本で知ってはいるけれど」という人がほとんどである。

昔話研究者のひとりとしてそれは残念なことである。昔話には昔からの日本人のいろいろな思いが込められていて、その思いが文芸としてきちんとした語り口で表現されているのだから、それを大切にして子どもたちに聞かせてやって欲しいと思う。

私はその思いで、本書の刊行以後、各地の保育園、幼稚園、小学校、中学校、図書館、公民館などで、「昔話とは何か」を話してきた。そして、昔話についてすこし体系的に勉強したい人の

ために「昔ばなし大学」なるものを旭川から石垣島まで、全国で開講してきた。そういう活動の中で私は、昔話についてもすこし詳しく知りたいという人がたくさんいることを知った。

そこで、二十六年前に書いた本だが、いいたいことは変わらないので、本文に多少の改訂を施して、刊行することにした次第である。

本書の目的については、初版のまえがきにゆずる。

初版へのまえがき

日本の昔ばなしが現在おかれている状況には三つの側面があるように思う。ひとつは、全国的にいろいろがなくなりつつあり、テレビが普及して、農村でお年寄りが子どもたちに「むかし」を語ることがきわめて少なくなってしまったこと。第二は、それにもかかわらず全国の調査者の地味な努力で、お年寄りに語ってもらったままの資料集が、かなり豊富に出版され、いまや日本は、総類話数で八万話ともいう昔ばなし資料大国であること。第三は、昔ばなしがさかんに子ども向けに再話されたり絵本化されたり、テレビの番組になったりして、もてはやされていることである。

この本を書く気になつたのは、第三の側面に関して、思いがあるからである。昔ばなしは長い年月、つねに変化しながら伝えられてきた。その変化は、口で伝えるという行為の枠のなかでおきる変化だった。そこでは、口伝え文芸として自己の姿を守る力がはたらいっており、そこからはみだす変化は、一時的におきても修正されてきた。(この点は本文のなかでふれる。)

ところが、子ども向けの印刷された昔ばなしには、口伝えのよさが削られたものが多々あるようにみうけられる。口伝えということ、はじめから文字として書きつけられた創作文学とのちがいがまったく無視されて再話されているものが多く目につく。口伝えが衰弱して、印刷物だけが残ると、修正の可能性がなくなってしまう。そこでこの本の前半では、口伝え昔ばなしの語り口の特徴をはつきりさせたい。

また一方では、昔ばなしイコール童話、童話イコール教訓のお話という誤解があつて、昔ばなしに、かならず何か道徳的教訓の性格をあたえないと気がすまない再話者、解説者も多い。どの民族でも、おとなが子どもに話を聞かせるときに教育的意味をこめていることはたしかだろう。だが、それは道徳的教訓一色ではなかった。昔ばなしはもっとひろい人間観や世界観、自然観の滲みこんだ大きな世界なのである。

民衆のあいだで、ひっそりと口伝えされてきた昔ばなしは、しかし、ごくひかえめにしか、そのことを教えてくれるだろう。この本の後半で書きたいのは、わたしがここ数年、各地でお年寄りから口伝えを聞かせてもらつて感じたことと、昔ばなし資料集をていねいに読んで得たことである。

その際、現在、子どもに童話として昔ばなしをあたえるとき、昔ばなしのどんな性質が意義をもっているのか、伝えるということにどんな意義があるのかということを中心にすえて考える。従つて、「昔ばなしとは何か」といつてもその論点は以上のことに限定されている。この問いに対しては、いろいろな学問分野から答えの試みがなされなければならないだろう。この本で述べたいことは、主として昔ばなしの文芸学的研究をしてきた一研究者の、上述の二点にしばった答えの試みである。従つてもし、本の題名に説明的なことばを加えるとしたら、「現代人にとつて昔ばなしとは何か」ということになるだろう。

うした人間観や自然観をあらわさない。あからさまに、大声では言わない。昔ばなしがわたしたちに語りかけてくることは、すなおな心で、じつと耳を傾けないと聞こえてこない。ちょうど、自然のなかのかすかな風の音や、鳥たちのなき声を聞くときのように。

もし、そうやって耳を傾けられたら、昔ばなしは、現代に生きるわたしたちにも、たくさんこのことを教えてくれるだろう。この本の後半で書きたいのは、わたしがここ数年、各地でお年寄りから口伝えを聞かせてもらつて感じたことと、昔ばなし資料集をていねいに読んで得たことである。

その際、現在、子どもに童話として昔ばなしをあたえるとき、昔ばなしのどんな性質が意義をもっているのか、伝えるということにどんな意義があるのかということを中心にすえて考える。従つて、「昔ばなしとは何か」といつてもその論点は以上のことに限定されている。この問いに対しては、いろいろな学問分野から答えの試みがなされなければならないだろう。この本で述べたいことは、主として昔ばなしの文芸学的研究をしてきた一研究者の、上述の二点にしばった答えの試みである。従つてもし、本の題名に説明的なことばを加えるとしたら、「現代人にとつて昔ばなしとは何か」ということになるだろう。